
VANILLA

能勢恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VANILLA

【Nコード】

N4355Z

【作者名】

能勢恭介

【あらすじ】

ふとマーケットに立ち寄って鼻腔をくすぐったのはバニラの香りだった。

冷たい夜気。

エンジンの色。

ふと意識がとぶ。

ヴァニラは甘くない。

スーパーマーケットの陳列棚で見つけた。ヴァニラエッセンスだ
つたろうか、それとも……？

思わず手が伸びた。

そっと香ってみた。

甘い匂いがした。

店内BGMがふつと遠くなった。

意識まで遠くなった。

いや、わたしの意識はしっかりと「ここ」にあった。意識したま
ま、意識が飛んだ。それは過去と呼ばれる方角かもしれないし、も
しかしたら全然違った別の方かもしれない。

けれど、甘い匂いがした。

胸の奥の方がつんとした。

そのころ、わたしはいつも時計を五分進めていた。

意味はちゃんとあった。

わたしは時間を自由に使いたかったのだ。

RSがわたしを莫迦にした。

曰く。

「得したい気分だけでしょ。たとえば朝？」

笑った。

わたしもRSも笑った。

スーパーマーケットでヴァニラがわたしを呼んだとき、やはりわ
たしの右腕では、時間が五分だけ進んでいた。

左手に提げた買い物かごには、以下。

シリアル、フリーズドライのバナナスライス、カシューナッツ、

トマト、トマト、トマト、トマト、キュウリ、キュウリ、タマゴが
ダース、値下げラベルがついた豚肉のスライス、そして牛乳とウー
ロン茶のボトルが一本、これで何日分だろう。

わたしはしばらくヴァニラの前で停まっていた。

ケーキを作るような趣味も技術もないから、これを買ったかごの
中でトマトの友達にしたところで、結局は芳香剤になりさがってし
まうだけ。欲しいかどうかもわからなかった。

けれど、甘い匂いだった。

なんとなく、本当になんとなく、右腕が伸びていた。

ヴァニラビーンズ。

メキシコ産。

遠くまでようこそ。

わたしは左手にのせて、ビンに鼻を近づけた。

甘い匂い。

ビンの口がゆるんでいるのだろうか。甘い匂い。

甘い、匂い。

わたしは買い物かごを床に置いた。牛乳ビンが傾いて、そのまま
トマトの一個にもたれるようにして倒れてしまった。わたしはあわ
てて牛乳を立てた。疲れているのはあなたただけではないんだよ。

ヴァニラオイルを買おうというのではない。

買ったところで芳香剤以外のなものでもない。

けれど、わたしはその匂いに両肩をつかまれてその場から動けな
かった。

右腕で五分先の時間がかたりと音がするように秒針を進めていた。

いつか、駅の巨大な時計の下で、わたしは買ったばかりの文庫本
を開いていた。

空はよく晴れていて、風もなく、気持ちよかった。

空がよく晴れていたから、文庫本のページは新雪の朝。まぶしく
てわたしは涙をにじませながら文字を追っていた。そしてそのうち、

小説のストーリーなどまったく、目から入ってそのまま涙と一緒に流れ落ちるようになってしまった。わたしはそしてページを閉じて、ほっと時計を見上げた。

そのころ、わたしの右腕には五分先の時間は存在していなくて、みんなと同じ、正常なときを刻み続けていた。それが当たり前だとわたしは疑うこともしなかった。

まだわたしは「こちら側」にいたわけだ。

見上げた空に向かって、時計の針が指していて、時刻は正午に近かったと思う。わたしはまだ学生で、快速電車をただ待っていただけのような気がする。あまりよく憶えていない。空に雲がひとつもないくらい晴れていた、そのことだけはよく憶えている。

そして、わたしの時計がまだ五分後を指していなかったということも。

携帯電話のバッテリーが切れたままだった。

RSはいまどうしているだろうか。

わたしは買い物かごを床に置いたまま、まだヴァニラオイルのビンを眺めていた。

鈴が転がるような笑い声に、ふとわたしはびくりと振り返ると、高校生くらいに見える女の子が、大学生くらいに見える男の子と手をつないで買い物かごを振り回していた。

振り回しているように見えた。

わたしはヴァニラオイルのビンを棚に戻した。

そしてそっと右手の匂いをかいだ。

不思議とヴァニラの香りはしなかった。

高校生くらいに見える女の子は、頭ひとつ背の高い男の子を見上げるように、まるでスキップするように歩いていた。

わたしもああいう頃があったのだろうか。

買い物かごを拾いあげ、わたしはヴァニラの棚をあとにした。

ふと気づいたのだ。

閉店が近いのだ。

空が壁のように見えた。

きつと街の明かりが間接照明みたいに見えたからだ。

わたしはポケットの中で転がっている携帯電話のボタンになんとなく左手の指を触れていた。電源が入らない電話機は、小さな子どもたちがままごと遊びで使うおもちゃの電話と同じだった。スーパーマーケットを出て、やたらと広い駐車場にはもうほとんど車は残っていないくて、わたしはレコードショップに長居しすぎたことを悔いた。

欲しいレコードがあつたわけではなくて、わたしはただ、そういう旋律のかけらにそつと触れているのが好きだっただけだ。ビートを左足で刻むより、右腕の時計が五分後の未来の時間を刻むより、わたしは鼓動に触れるのが好きだった。

ジーンズのポケットからイグニッションキーを取り出した。背負つたデイパックが重い。

牛乳とウーロン茶のせいだ。ねっとり黒く広がるアスファルトうつすら濡れているように見える。気温が低い。何となく不安だったが、わたしはしばらく歩いた先に駐輪したバイクにそつと指を触れてやった。ここへ来る途中で満タンにしたタンクはよく冷えていた。

エンジンをかけようとして、鈴が転がるような笑い声が聞こえた。振り返るとあの子がいた。はじけるような笑顔つて、きつとああいうのをいうんだ。

わたしはきつと、凍ったような顔をしていたのだと思う。バイクのミラーで前髪を直すふりをして、そつとのぞき込んだわたしの目は、いつになく澄んでいた。わたしの目がこんな色をしている日は、るくなことがない。

鈴の音はわたしの左後ろからゆっくりと右後ろへと転がっていき、それに混じってコントラバスみたいに低い、けれど短い笑い声がつ

づく。あの男の子だ。きつとわたしと大して歳など違わないに違いない。だから？

ふたりはわたしから少し離れた、バイクなら3秒くらいで届くくらいの距離に止められた、やたら図体の大きな、装甲車みたいな車に乗り込んだ。ドアが閉まると、鈴の音が消えた。鈴の音が消えた駐車場は、しばし静かだった。それが合図だったかのように、スーパーマーケットの明かりがすべて消えた。

わたしはエンジンに火を入れた。レコードショップで旋律にさんざん触れているあいだ、600ccインライン4はすっかり興奮も冷めて夜露に濡れていた。多少ぐずったが、スロットルを一度あおるとアイドリングはすぐに安定する。いい子。グラブをはめて、フルフェイスのヘルメットをかぶると、わたしの意識がすつと分離される。デイパックが重い。

シールドは開けたまま。鈴の音とコントラバスが収まったあの装甲車もエンジンに火を入れたらしい。けれどなかなか走り出さない。それはわたしも同じ。

グラブからのぞかせた右手首の五分後は、もうあと一息で日付をまたいでしまう。右手首の五分後が日付を超えたとき、わたしはまだ五分前の今日にいる。

水温系の針がぴくりと動く前に、わたしはバイクにまたがった。振り返るとまだ装甲車はそこにいた。

ヘルメットの中で、甘い匂いがした。

わたしはひどく後悔した。

料理に使わなくてもいい。芳香剤になりさがつてもいい。あのヴァニラオイルを買っておけばよかった。きつと欲しいのは今日だけだ。日付が変わればわたしの意識はあの香りを必要としなくなる。

ヴァニラ。

暖かい。

時計を見上げてわたしはずつと思っていた。

春。

何かが始まる予感がしていた。

快速電車を待っているはずなのに、わたしはもっとほかの、全然違う別なものを待っていた。

そのときだけ。

文庫本をあのころ愛用していたバッグにしまい込むと、目を閉じた。

瞼の裏にわけのわからない模様がいろいろ浮かんで、波紋のようなカレイドスコープのような、そんな模様をわたしは楽しんだ。いつか、この模様をスケッチしてやろう。

瞼を優しく閉じていると、目の前が黄色く見える。秋の日の銀杏の葉のような、鮮やかな黄色。そして目を開けると、世界はうっすらと蒼に染まっている。

時計の針は長い方も短い方も、まっすぐに天を指していた。

まもなく電車がやってくる。

待ち合わせ場所にRSは時間通りに来てくれていただろうか。

わたしは勢いをつけてくるりと踵を返し、改札口へとすべり込む。

一度、二度とわたしはスロットルをあおった。

エンジンが吠える。

頼もしい。

アンダーカウルの間隙から、ぼんやりと熱気が上ってくる。頃合いだ。日付が変わる前に。

そう、わたしの右腕の五分後が、わたしより先に日付を超える前に、帰らなきゃ。

サイドスタンドを左のかかとでしまい込み、右手でスロットルを軽く開いて、左手の指がクラッチを握り、左足のつま先がニュートラルから第1速。左手がクラッチレバーをリリースして、わたしはねっとりしたアスファルトの上を走り出す。

やはりアスファルトの上はうっすらと濡れている。

空気までがしっとりとなわたしを包み込む。

わたしは装甲車の少し脇をゆつくりと抜ける。

あの女の子はまだはじけたような笑顔を、あの男の子の頬に寄せ
ていた。ふたりがそっ

とキスを交わす前に、わたしは通りに躍り出ている。

右手の五分後が日付を超える前に。

シールドを閉じると、まだ甘い匂いがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4355z/>

VANILLA

2011年12月15日00時50分発行